

JAPAN JAZZ™

10

Vol. JUN. 2011



ルパン三世は踊る

ルパンティック・ジャズで甦る昭和ナイト・クラブ・ミュージック
大野雄二, モンキー・パンチ

LET'S DANCE LUPIN THE THIRD

前人未到の“Neu Jazz”を切り拓く

日野皓正

アルゼンチン・ジャズの実

この素晴らしい世界～ニューオーリンズから気仙沼へ

**サッチモが結んだ
愛と友情の被災地支援**

連載 愛すべきB級グルメ的ジャズ 第10回

デューク・ピアソン

月刊エレクトーン6月号 別冊

WHAT A WONDERFUL WORLD

MUSICAL DONATION FROM NEW ORLEANS



ニューオーリンズからの寄付によって揃えられた真新しい楽器で熱演する気仙沼スウィング・ドルフィンズ。彼らの演奏は避難所にいる被災者の皆さんを大いに勇気づけた。写真下左端の指揮者はバンドの指導者・須藤丈市会長(*)

ニューオーリンズ〜気仙沼

サッチモが結んだ 愛と友情の被災地支援

3.11の大震災は多くの人命や財産と共に、人々が地道に育んできた文化まで一瞬のうちに奪い去ってしまった。気仙沼で活動を続けてきたジュニア・ジャズ・バンド「スウィング・ドルフィンズ」もその一つ。津波で流されてしまった楽器さえあれば、被災者の皆さんを演奏で勇気づけられるのに…。だが、そんな彼らの願いが奇跡のように叶う日がやって来る。4月24日、アメリカからの支援金で揃えられた楽器によるビッグバンド・サウンドが避難所に響き渡ったのだ。それは日本人が戦後の焼け野原のなかで聴いたジャズ同様、未来への希望に満ちていた。そして、この寄贈された楽器こそ“日本のサッチモ”と称されるトランペッターと、そのピアノ&バンジョー奏者の妻が米・ニューオーリンズと長年にわたって築いてきた愛と友情の証しなのである。●高橋慎一 写真提供：日本レイ・アームストロング協会 (*=Photo by Yoshio Koizumi)

日本列島に未曾有の被害をもたらした、東日本大震災。東北地方では、発生から2カ月が過ぎた現在も、不便な避難所生活を強いられている方が大勢いる。筆者自身、宮城県にある母方の実家が被災し、家屋が全壊する被害をこうむった。東北地方の惨状を、決して他人事ではなくニュースで確認する日々を過ごしている。

一日でも早い復興を。そう願う被災者の方々に勇気を与える、心温まるニュースが、宮城県気仙沼市から届けられた。市内の小中学生によるジャズ・オーケストラ「スウィング・ドルフィンズ」によるジャズ・コンサートが、去る4月24日に避難所である気仙沼市総合体育館野外会場で開催されたのだ。気仙沼市は、今回の震災で最も大きな被害を受けた地域の一つ。スウィング・ドルフィンズも、ほぼ全ての楽器が津波で流され、練習場所も無くなった。そんな状況下で行われたこのコンサートは、今回の震災を受けて、ジャズの聖地・ニューオーリンズから寄贈された楽器の、お披露目ライブとして開催された。

2005年、大型ハリケーンによって壊滅的な被害を受けたニューオーリンズと、同じく巨大な自然災害の犠牲となった宮城県の間には、以前からジャズを愛する人々による草の根の交流が行われていた。今回の楽器寄贈から記念コンサート開催に至る地域間の友好を、日本ルイ・アームストロング協会会長でトランペッターの外山喜雄氏に聞いた。

日本発“銃に代えて楽器を”運動

「そもそも、日本とニューオーリンズの交



Band members, students and faculty of George Washington Carver Senior High School welcomed musicians from Japan to their school on Aug. 4. The visitors, members of the Wonderful World Jazz Foundation of Japan, donated 13 trumpets and a trombone to band members. Yoshio Toyama, president and founder of the foundation and a trumpet player, hands 12th-grader Justin Pierre his new trumpet. The event featured a performance by the Carver band, the TBC Brass Band, and Toyama, who joined in a second-line with the students.

「音楽の寄付」と見出しのついた米・ニューオーリンズ地元紙の記事。2005年8月、同地・カーバー高校のバンドに13本のトランペットと1本のトロンボーンを寄贈した

流がスタートするのは、今から40年ほど前に私たちが本場のジャズを学びに、同地を訪れたことがきっかけだったと思います」

外山氏と奥様の恵子夫人によるニューオーリンズでの武者修行滞在は、5年にも及んだ。現地で浴びるように素晴らしい音楽に触れた2人は、大きな感動を得ると同時に、ニューオーリンズが抱える問題にも直面することとなる。

「貧富の差が激しいニューオーリンズでは、豊かな才能がありながら、楽器を所有で

きない子供たちがたくさんいました。あったとしても、リペアされずに相当傷んだ楽器を使っている場合も多かった。そんな環境にあって、望まない不幸な道に巻き込まれてしまう少年たちをたくさん見えました」

サッチモ（ルイ・アームストロング）が銃を発砲し収容された少年院でトランペットと出会ったように、音楽活動に参加することが、ニューオーリンズの少年たちの心の支えとなるのでは。そんな思いから、二



外山邸の車庫にズラリと並べられた全国から寄せられた楽器。ニューオーリンズへ贈られる全ての楽器はリペアをグローバルが、運送は日本通運が全面協力してくれている



2001年、ニューオーリンズのNPO団体「Fearless Tigers Cultural Arts Center」に楽器を寄贈。地元の子どもたちと外山夫妻

人は17年前から現地に楽器を送るプロジェクトを開始する。“Horns For Guns (銃に代えて楽器を)”のスローガンを掲げた活動は、現地の人々に信頼を持って浸透していった。

「そんなボランティア活動を地道に続けているときでした。ハリケーン・カトリナが襲来し、ニューオーリンズの街が壊滅的被害を受けたのです。僕はすぐに日本で救済ライブと募金活動を開始しました。全国のジャズ・ファンから寄せられた募金はトータルで1,000万円集まりました」

被災した現地には、お金のみならず、寄付で募った楽器も贈り続けた。楽器修理・販売業の株式会社グローバルが、福田忠道社長(当時)の英断で提供された中古楽器の修理を買って出る等、音楽を愛する周囲の人々の賛同の輪が広がっていった。17年間で約760個の楽器がニューオーリンズに届けられた。

「仙台のジャズ・バー“ジャズ・ミー・ブルース nola”のオーナー、佐々木孝夫さんがユニークな支援をしてくれたんです。ニューオーリンズに募金を、というだけではなかなか皆さんの関心を呼ぶことが出来ない。そこで彼は、独自のルートで入手した黒人のジャズ人形1,000体を、1体500円でボランティア販売したんです。完売し、売上金は全額現地へ渡りました」

皆が知恵と行動力を駆使して、ジャズの聖地を支援し続け、日本とニューオーリンズのジャズが取り持つ関係は、深いものになっていった。

“日本へ恩返しを” ニューオーリンズからの善意

そこに発生した、今年3月の大震災。日本の東北地方が壊滅的な被害を受けた



“ニューオーリンズの皆さん、ありがとうございました!”贈り物を手に満面の笑みを浮かべる子どもたち。楽器はライブの1週間前、気仙沼に届けられた。Photo by Takao Sasaki

ニュースが、世界を駆け巡った。

「ニューオーリンズの老舗ライブ・ハウス“ティピティーナ”がすぐに反応してくれました。ここは、僕らの“銃に代えて楽器を”の精神にいち早く共鳴してくれて、《Instruments A Comin'》なる楽器を集めるボランティア・イベントを主催しているんです。今年は5月2日の開催だったのですが、東北地方の窮状を知り、4月の段階で前倒しをして義援金を送ってくれました」

被災し、楽器を失った子供たちに、もう一度ジャズを演奏する喜びを味わってもらいたい。ジャズを愛する気持ちが一つになり、集まった金額は11,000ドル(約90万円)。ニューオーリンズの人々はいつか日本に恩返しを、の心を持ち続けてくれたのだ。

「皆、貧しくて、スラムに住んでいるような人たちが、必死になって募金してくれ

た。今まで我々がニューオーリンズに対して行ってきたボランティア、今回は逆の立場になって彼らが援助をしてくれた。このつながりの輪がうれしいです。私は何も大変な作業はなく、あっち(ニューオーリンズ)とこっち(宮城)で自然とやりとりがまつまって行きました」

“ティピティーナ”以外にも、支援を表明する人々が続々と名乗りを上げた。同じく現地のライブ・ハウス“ニューオーリンズ・ジャズ・セレブレーション”のオーナーは、paypal(ペイパル:インターネットを利用した、国際オンライン決済サービス)に募金口座を開設し、東北への支援募金に乗り出した。

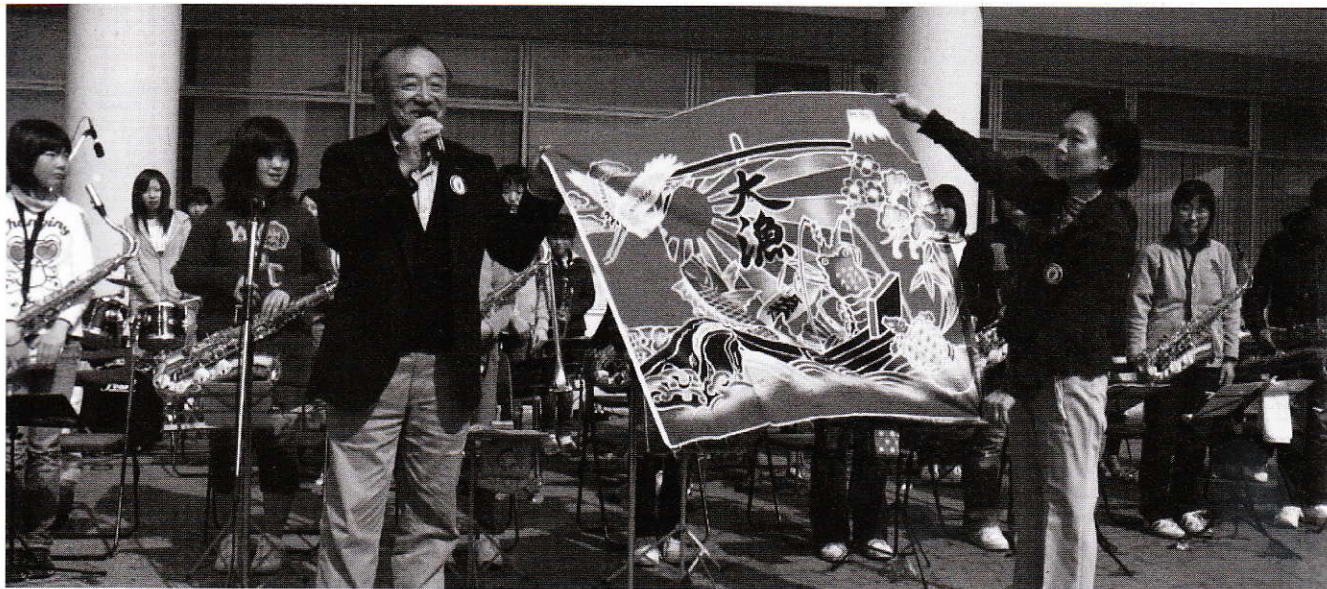
「うれしかったのは、現地で集まった募金を“トヤマのところに送れば大丈夫だ”と判断してもらったこと。長年、2国間の交流を図ってきたことで、信頼を持ってい



4月24日、720名(当時)の避難所となっている気仙沼市総合体育館前「サポート広場」で外山夫妻から子どもたちへと、改めて楽器が手渡された(*)



《気仙沼復興支援ライブ》の最後は、外山夫妻ら出演者全員による《聖者の行進》。避難所に鳴り響いた希望のサウンドは、間違いなく天国のサッチモにも届いたことだろう(*)



スウィング・ドルフィンズの子供たちが感謝の言葉を寄せ書きした大漁旗を掲げる外山喜雄・恵子夫妻。この旗は夫妻自ら、この夏ニューオリンズへ持参する予定だ(*)

てくれたようです。そのぶん、責任は重大です。募金をしっかりと被災地に届けなければなりません]

楽器と練習場所を失ったスウィング・ドルフィンズに、こうしてニューオリンズから楽器が届けられた。必要な楽器のオーダーを聞き、外山氏が楽器を揃え、前出の「ジャズ・ミー・ブルース nola」の佐々木氏、《定禅寺ストリート・ジャズ・フェスティバル》の実行委員と共に、子供たちに新品の楽器が手渡された。

「仙台で開催している定禅寺ジャズ・フェスも、今まで積極的にニューオリンズ支援を行って来ていました。東北とニューオリンズには、いつの間にかジャズを絆とした民間レベルのネットワークが出来上がっていったんです]

届けた楽器はトランペットが4本、トロンボーンが4本、サクソがテナー2本、アルト2本、バリトン2本…、キーボードとギター、ベースは外山氏が気仙沼に送り、栃木の宇都宮ジュニア・ジャズ・オーケストラからも以前使っていたドラム・セットが贈られて、地元での練習、演奏活動を行う下地が整えられた。

“サッチモに届け”と被災地で熱演

寄贈された楽器のお披露目コンサートが行われた4月24日、外山氏は恵子夫人と共に気仙沼入りし、ドルフィンズのメ

ンバーと共演を果たした。

「前日の夕方に東京での仕事を終えてからの現地入りでした。夜中に仙台に着いたときは、大雨が降っていたのですが、翌朝起きてみると空は快晴。同行してくれたスタッフと共に、一路気仙沼を目指しました]

会場となった、気仙沼市総合体育館に着いてみると、7,8台ものTVカメラと、多くの新聞記者が一行を待ち構えていた。日本〜ニューオリンズを結ぶジャズの絆への関心は高く、同ライブはNHKを筆頭に民放各局のニュースでも、大きく取り上げられた。

約2時間に渡って開催されたライブでは、定禅寺ジャズ・フェスのバンド、仙台のストリート・プラスバンド「ジャンピング・クロウ」等が出演し、ドルフィンズの子供たちを盛り立てた。被災地にもかかわらず、野外会場には、音楽に一時の潤いを求める人々が400人以上も詰めかけた。

「ドルフィンズはアンコールも含めて全6曲を演奏し、観客から喝采を浴びました。オープニングはドルフィンズのテーマ曲とも言うべき〈オン・グリーン・ドルフィン・ストリート〉。ウディ・ハーマンの〈ウッド・チョッパーズ・ボウル〉では、メンバーが果敢にアドリブに挑みました。〈聖者の行進〉では私も演奏に加わり、空から子供たちを見舞ってくれているサッチモに届け

とプレイしましたよ]

アンコールの〈ふるさと〉では、多くの観客が感極まり涙を流した。「事情により気仙沼を離れる人もいるでしょう。そんな方々もふるさとを思い出してください」。メンバーのMCが被災者の胸に響いた。演奏終了後、外山氏はメンバー全員からサインを求められ、「元気にスウィングしてください！ニューオリンズに届くように!!」と書き記したそうだ。

「ライブが終わってから、車で東京に戻る途中、被災地に立ち寄らせていただき、状況を目の当たりにして身の引き締まる思いがしました]

米国のルース駐日大使のツイッターでも言及された同ライブ。国際交流基金の協力も得られ、市民間での草の根レベルでの国際交流は十分に果たされたはずだ。被災された人々の涙と笑顔が、その成果の証だろう。

「今回のライブを、支援してくれたニューオリンズの方々が喜んでくれた。それがうれしいです。ドルフィンズのメンバーたちは、自分たちでメッセージを記した大漁旗を作り、楽器のお礼にニューオリンズへプレゼントします]

被災した東北地方の復興には、かなりの時間がかかるだろう。しかし、ドルフィンズの子供たちのようなパワーがあれば、着実に事態は好転してゆくはずだ。

“元気にスウィングしてください！ニューオリンズに届くように!!”

液状化で自宅が“全壊”認定 被災地・浦安からニューオリンズ～気仙沼を結んだジャズ魂

気仙沼とニューオリンズ、被災地間の橋渡し役として楽器と素晴らしい演奏を届けた外山喜雄・恵子夫妻。懸命にボランティア活動を行う2人だが、実は彼ら自身が今回の震災で大きな被害をこうむっているのだ。

2人が自宅兼事務所を構える千葉県浦安市は、地震による地面の液状化で、多くの家屋が居住不可能なほどの被害を受けた。外山氏に話を伺い、市内の状況を確認するために、筆者は浦安を訪ねた。

市内の閑静な住宅街にある外山邸は、外から眺めただけでも分かるほどに傾いていた。周囲を



浦安市内の公園駐車場で1メートル以上も地面から突き出したマンホール。外山さんは震災の脅威を忘れないためにもモニュメントとして残すべきだと語った

見渡せば、近隣の住宅もそれぞれ、右に左に傾斜している。

ご夫妻に出迎えていただき、庭に案内してもらった。地下から噴き出した砂でエアコンの室外機が埋もれ、地面に大きな段差がついたことで鉄製の柵が大きくひしゃげている。

「室外機は人力では移動できない程、砂の中に埋没していました。それだけの量の砂が地面から湧き出てきたんです」

外山氏に状況説明を受けながら、ご自宅の室内に案内してもらった。2階のリビングまで歩いていくだけで、軽い船酔いを覚える程、家屋が傾斜している。この状態では、とてもこの家で生活することは出来ないだろう。

「敏感な方は、一瞬で頭が痛くなるそうです。僕らはここが事務所ですので、昼間は仕事のために滞在し、夜は被災者割引が使えるホテル等に宿泊する生活を送っています」

ご自宅で取材した後は、外山氏に市内を案内してもらった。住宅街では多くの家が傾き、駅周辺の道路や広場は、縁石が大きくずれて、地面の土が露出している。ある企業の社宅は、玄関が地面から70～80センチも浮かび上がっていた。巨大な下水管が地面を突き破り、完全に露出した地域もある。

浦安市の一日も早い復旧を見守ると同時に、困

難な状況のなか、無私で音楽ボランティアに励む外山ご夫妻に、改めて頭の下がる思いがした。(文・写真：高橋慎一)



砂に埋まった自宅裏のエアコン室外機を指さす外山夫妻。家屋は裏側に向かって81センチも沈み、傾いた

ニューオリンズとのもうひとつの絆 日本から名門フレンチ・クォーター・フェスに2バンドが出演!

4月7～11日の4日間、ジャズ発祥の地・ニューオリンズで開催された第28回「フレンチ・クォーター・フェスティバル」(FQF)に東京と大阪のディキシーランド・ジャズ・バンドが出演した。この伝統ある音楽祭に出演したのは、東京のサウンド・オブ・ベスパーズ(SOV)と大阪ホット・キャッツ(OHC)で、両バンドにとっては初出演。FQFに日本から2バンドが参加したのも初めて。

FQFは、北米最大級の無料イベントとして有名で、毎年、地元の方を初めに国内外からたくさんミュージシャンと観客が参加する。今年は、延べ53万人以上の来場者がニューオリンズの美観地区フレンチ・クォーターやミシシッピ川の河

川敷に設置された特設ステージにジャズ、R&B、ソウル、ブルース、ラテン、ワールドや地元特有のザディコとケージャン音楽を演奏する260のバンドを楽しんだ。

オープニング・バラードでは、東京と大阪のバンドが合同で、有名なバーボン通りを1時間余りマーチングした。28度を超える炎天下でも通りの両サイドに集まった多くの観客から熱い声援を受けた。震災直後の日本から2バンドも参加していることに驚いた人も多かったが、「日本はこれからも頑張るよ」というメッセージを伝えるために来ているというと「一日も早い復興を願っている」という温かい言葉もたくさんもらった。



ステージで熱演を繰り広げる大阪ホット・キャッツ

バラードに続いて、OHCがインターナショナル・ステージでライブを繰り広げた。関西で活躍しているディキシーランド・バンドのピック・アップ・メンバーで構成された彼らは、迫力のあるリズム感で会場をグッとひとつにした。また、両バンドを応援するファンで構成されたツアーのメンバー(大阪・16名、東京・14名)がハッピーを着て、小さな鯉のぼりを振りながら踊っていたのも大ウケ。

FQFの最終日に東京のSOVが同じステージに登場し、CD販売の全額を東日本大震災の義援金として寄付するとアナウンスすると、50枚ほどのCDが一時間以内で完売。1,000ドル以上集まった義援金はSOVがお世話になっている仙台の教会へ直接寄付された。

ちなみに、両バンドが出演したのは海外(ベルギー、フランス、ドイツ、イギリス、スウェーデンなど)バンド専用のステージで、毎年これを目当てに、地元の人がたくさん集まる。その理由は、海外バンドが昔ながらの伝統あるニューオリンズ・スタイルのジャズを大切に守り、純粋なクラシック・ジャズが楽しめるからなのである。(文：クリス)



フェスに参加した東京のサウンド・オブ・ベスパーズ(「新」のロゴ入りTシャツのグループ)と大阪ホット・キャッツ(OHC)のロゴ入り帽のグループ